

新島襄とお札になった学校創立者

講演	石川 立 [いしかわ・りつ]
講師紹介	同志社大学神学部教授 〔研究テーマ〕聖書の神学的・哲学的解釈、解釈学、教父学

はじめに

皆さんは買い物をして支払いをするとき、現金を使うことはあまりないかもしれません。しかし、現金をあまり使わないとはいえ、お札には一万円札、五千円札、二千円札、千円札の四種類があることは皆さんご存知のはずです。この4種類のうち、二千円札には皆さんあまりお目にかかったことがないかもしれません。また、五千円札にもあまり馴染みがないかもしれません。

一番馴染みのない二千円札を除き、ほかの一万円札、五千円札、千円札には、それぞれ人の顔が出ています。一万円札には福澤諭吉が載っています。五千円札には樋口一葉、千円札には野口英世が描かれています。五千円札の樋口一葉は作家、千円札の野口英世は医師、細菌学者、一万円札の福澤諭吉は、いろいろな仕事をした人ですが、現在の慶應義塾大学の創立者として有名です。

さて、これらのお札が、二〇二四年の上半期に、あまり流通していない二千円札を除き新しくなります。そして、描かれている顔も変わります。一万円札は福澤諭吉から渋沢栄一になります。日本の資本主義を牽引した実業家ですね。「近代日本経済の父」と言われています。千円札は野口英世から北里柴三郎になります。「近代日本医学の父」として知られている微生物学者ですね。そして、五千円札は樋口一葉から津田梅子に替わります。日本の女子教育に貢献した、現在の津田塾大学の創立者です。

この講演では、津田梅子が二〇二四年から五千円札の新しい顔になるということを受け、すでにお札になっている学校創立者、福沢諭吉と、これからお札になる津田梅子とを取り上げ、この二人の学校創立者の建学の精神や建学の事情を調べ、そのことと、同志社の創立者、新島襄の建学の精神、建学の事情とを比較したいと思います。そうすることによって、主役はあくまで新島襄ですので、同志社の建学の精神の特徴を際立たせたいと考えます。

第1章

明治期の学校設立

福澤諭吉の話から始めますが、その前に、明治期に多くの学校が設立された状況について確認しておきたいと思います。

明治政府が一八六八年九月に成立しました。その前の江戸時代では二〇〇年以上も鎖国が続いていたので（一六三九―一八五四年）、日本は政府の組織、軍隊、経済、法律、技術、学問等々の様々な分野で、欧米から大きく後れをとっていました。明治新政府としては国の力を底上げしなければなりません。富国強兵を目指しました。富国強兵を実現するために、大きく後れをとっていた政府の組織、軍隊、経済、法律、技術、学問等の分野のレベルを欧米諸国並みにすることが、明治新政府にとっての喫緊の課題となりました。

明治政府は教育についても、急いで、とりあえず形だけでも欧米並みの体制を整えようとしていました。そのためだけではなく、岩倉具視使節団を欧米に派遣しました。この使節団の目的は、条約の改正のため、また、欧米の産業・経済そして教育の現場を視察するためでした。教育制度の視察もきわめて重要なテーマの一つだったわけです。ちなみに、岩倉使節団が派遣されたころ、新島襄はアメリカにいました。アーモスト大学で学位をとり、アンドーヴァー神学校で牧師になるために学んでいるところでした。新島は使節団の一員、文部官・田中不二麿を助ける役を請われ、彼と一緒に欧米の教育制度を視察します。そして、この視察の総括として、後日「理事功程」という報告書が出されたのですが、これは実質、新島がまとめたものと言われています。また、この岩倉使節団の一行とともに、あとで述べますが、まだちっちゃい子どもだった津田梅子が一緒にアメリカに渡っています。

さて、欧米の教育制度を模範とし、近代学校制度を創設していくとする、明治時代の機運のなかで、数多くの官立、私立の学校の設立が続きます。

明治初期の代表的な学校としては、まずは、政府が作った東京大学、最初の私学・福澤諭吉の慶應義塾が挙げられます。キリスト教主義の学校も次々と設立されました。明治政府はキリスト教の導入を警戒していましたが、欧米からの要求もあってキリスト教を認めるようになり、それに伴い、キリスト教主義の学校が出来てきました。同志社はその代表です。同志社は新島襄という日本人が主導で設立されましたが、これは例外的で、たいていは外国人宣教師が学校をつくっていきます。キリスト教主義の女子学校も設立されました。また、国会が開設され法律が整備されてきたことに伴い、現在の法政大学、専修大学、明治大学、早稲田大学、中央大学の前身となる法律・政治の専門学校が相次いで設立されていきます。

第2章

福澤諭吉と新島襄の学校

福澤の慶應義塾

このように盛んな学校設立の気運に先立って、江戸末期に立ち上げた自分の塾を近代の学校に変えていったのが福澤諭吉です。

福澤は、一八三五年（天保五年）、一月一〇日（太陰暦では、前の年の一二月一二日）、大阪玉江橋北詰にあった中津藩（今の大分県）の屋敷で生まれます。大阪生まれです。一八三六年六月に父親が病死し、母子六人、中津に帰ります。

一八五四年、満十九歳になってすぐのころ、兄の三之助にすすめられ、蘭学を志し長崎に出てオランダ語の初歩を学び、翌一八五五年、また兄の三之助にすすめられ、三月、緒方洪庵の適塾に入門します。大阪に戻ったのですね。適塾は今も名の残る非常に有名な塾です。

一八五八年（安政五年）には中津藩の命令で江戸に出ます。そして、江戸・築地にある中津藩の奥平家の中屋敷に蘭学塾を開きます。これが慶應義塾の起源です。

一八六〇年（安政七年）、軍艦咸臨丸（勝海舟やジョン万次郎【中浜万次郎】）といった著名な人たちが乗船）に乗ってアメリカに渡ります。元号替わって万延元年、同じ年に帰国します。一八六二年には、文久遣欧使節団の随員としてフランス、イギリス、オランダ、プロシャ、ロシア、ポルトガルを巡り、その年の暮れに帰国します。

慶應義塾 創立の理由・目的

以上のように、福澤は若い頃から欧米の事情を書物からよく学び、また、実際にアメリカとヨーロッパに行つて見聞を広めました。その姿勢は、「欧米に学べ」というもので、福澤は欧米を模範として日本を欧米並みの国にしていこうと考えました。また、そういう役割を担った者として明治政府からも嘱望されていました。

この流れのなかで福澤は、一八五八年（安政五年）に開いた蘭学塾を、一八六八年（慶応四年）に、「慶應義塾」と定めました。その年の九月には、元号はもう明治に変わります。

福澤は、欧米にならう、という立場を貫きましたが、年を経るにつれ、国家主義的な傾向を強くしていきます。万世一系の皇統の基に日本の国体をつくらねばならないという考えを持つようになり、これに沿って、欧米諸国が建国の基とするキリスト教に対しては、これを排斥する立場に立ちます（注1）。

慶應義塾の精神は、「独立自尊」であり、身分の差なく学べる教育を提供し、教師と学生とが共に学び、共に教える「半学半教」という自由な雰囲気醸し出していました（注2）。

しかし、もともと福澤は、社会の利益に役立つ「実学の精神」を大事にしていたので、彼の後半生には、高等教育について経営者的観点による発言が強くみられるようになってきます。教育内容も、金持ちへの道である「実業人」の養成に傾いていきます。また、法科（のちの法学部）よりも理財科（のちの経済学部や商学部）に重点が置かれるようになります（注3）。

以上が、非常に大雑把なのですが、慶應義塾設立に関する福澤諭吉の考え方であり、傾向です。

新島襄と同志社

今日では、慶應義塾大学と同志社大学は、建っている場所も違いますし、入学の難易度も少々異なりはしますが、私立の総合大学という大きな括りのなかでは、他の私立の総合大学とともに、同列に並べられています。

しかし、慶應義塾を創設した福澤と同志社を創設した新島とでは、教育の目指すところがかなり違っていたと思われるます。その点を、新島襄について、これも大雑把になりますが、見ていながら確認していきたいと思います。

福澤は一八三五年に大阪の中津藩（今の大分県）の屋敷で生まれました。新島は、その八年後の一八四三年に、江戸にある安中藩（今の群馬県）の屋敷で生まれました。二人とも下級武士であり、若い頃は蘭学や英学など欧米の学問を学び、欧米に強い関心をもっていました。

この点ではほぼ同じなのですが、次の点は大きく異なります。

福澤は国から委託をうける形でアメリカ、ヨーロッパに行き、各所を見聞する機会を得ました。一方、新島は、外国にいくことが禁じられていた時代、自分一人の決断で国禁を犯して脱国し、たまたま上海で乗り換えたワイルド・ローヴァー号でアメリカに渡り、幸運にもワイルド・ローヴァー号の船主、ハーディー夫妻に見込まれ、アメリカの学校に通うことができました。

名門フィリップス・アカデミーで学び、続いてアーモスト大学でも学ぶという幸運を得ます。

もう一点、新島が福澤と大きく異なる点があります。それは、新島がキリスト教の信者になり、それどころか、キリスト教の牧師になったということです。これに対して福澤の場合は、先ほども述べたとおり、欧米の書物を学び、欧米を見聞し、欧米に模範を求めたのですけれども、欧米諸国の基盤にあるキリスト教については、これを日本から排斥しようとしたしました。

新島は一八六六年一月、フィリップス・アカデミーで学んでいたとき、同じ構内にあるアンドーヴァー神学校付属教会で洗礼を受けました。そして、アーモスト大学を卒業したあと、アンドーヴァー神学校に入学しました。神学校とは、牧師になるための学校です。新島は、皆さんご承知のとおり、実際に牧師になり、宣教師として日本に帰ってきました。

同志社 創立の理由・目的、特徴

新島は、江戸時代末期、経済、技術、教育等の分野で欧米から大きく後れをとった日本で二十歳すぎまで育ち、二十一歳のときに国禁を犯して脱国、アメリカで暮らし、実際に自らアメリカの教育を受けました。新島がもともと関心をもっていたのは教育だけではなく、脱国する前から彼は、当時禁じられていたキリスト教に強い関心をもっていました。新島が「ワイルド・ローヴァー号」に乗ってたり着いたボストンは、キリスト教の中でも、プロテスタントの教派・会衆派の牙城とも言える場所でした。新島を自分たちの実の子どものように迎えてくれたハーディー夫妻も熱心な会衆派の信者でしたし、彼が通った学校もすべて会衆派の学校でした。彼は神学校を出て、牧師になったわけですが、もちろん会衆派の教会の牧師になりました。

ですから、新島は、キリスト教の精神を基盤にした学校で、キリスト教の精神のもとで教育を受けた、ということになります。

新島はアメリカで、自分が江戸末期に受けた教育とはまったく違うキリスト教主義の教育を受けて、衝撃を受け、「これだ」と思ったのです。新島が、日本に帰るに際し、自分自身が実際に身をもって受けた、このような教育をこそ、日本の若者も受けるべきだと確信したのは当然のことだったと思います。

新島は、一八八八年十一月に、「同志社大学設立の旨意」を全国の主要な雑誌・新聞に発表しました。これは、実際は、徳富蘇峰が書いたもののようですが、新島自身の考えがもちろん表明されています。この中で新島は、「一国を維持するは、決して二、三、英雄の力にあらず。実に一国を組織する教育あり、智識あり、品行ある人民の力に拠らざるべからず。これらの人民は一国の良心とも謂うべき人々なり」（注4）と書いています。「日本という国を成り立たせ、維持するのは、英雄によるのではない、そうではなく、きちっと教育を受けた、しっかりした一人ひとりの国民の力によるのだ」という意味合いですね。

新島は「一人ひとり」を大事にしました。一八八五年、同志社創立十周年記念会で、新島は祝辞を述べます。新島は一年八か月ほどに及ぶ欧米旅行から帰国したばかりでした。新島は、旅行中に退学になった数名の学生の消息に触れ、「ほんとうに彼らのためには涙を流さずにはいられない。彼らは真の道を聞き真の学問をしていた人であったが、ついに退学させられることになった。諸君よ、人ひとりは大切である。ひとりは大切である」（注5）と涙ながらに語りました。有名な話ですね。

「人ひとりは大切」という考え方は、まさにキリスト教の基本的な考え方です。一人ひとりの人格とその人生を大切に、という考え方。権力を持ち、高い地位に就いている人が大切にされるのではない、どんな人も、貧しい人も、弱い人も大切にされなければならないのです。これが同志社の建学の精神の大きな柱です。

「人ひとりは大切」なので、あらゆる権力からも独立し、自分で立たなければなりません。自治自立の考え方です。自治自立とは言っても、困っている人に手を差し伸べないということではありません。助け合うことは大切です。ただ、大きい力に支配されないという意味です。

慶應義塾と同志社

同志社の建学の精神については、これも不十分ですが、以上までにして、慶應義塾と同志社について、建学の精神が異なっていること、福澤の教育論と新島の教育論は、ずいぶん違っていたということを確認しておきます。

同志社では、「徳育」が重要な教育の柱でした。新島は「徳育」を「心育」、さらには「与える教育」と言っています。新島は生前、この用語を使って「徳育」の必要性をよく語っていたようで、新島の葬儀には、勝海舟が揮毫した「彼等は世から取らんとす、我等は世に与へんと欲す」という^横句が用意されました。この用語を新島から聞いた生徒の一人、徳富蘇峰は、新島先生は「取る教育は世に山程ある。我等は与ふる教育をせねばならぬ」とよく説かれたと回顧しています（注6）。

「与える教育」とは奉仕、人に尽くすことを推奨する教育です。これに対して、「取る教育」とは、智識を得る教育であり、社会に出てからはお金を取る、地位を取る、名誉を取ることを勧める教育です。

新島が「取る教育」というときに脳裏にあったのは、具体的にどの学校の教育だったのでしょうか。新島の頭にあったのは、慶應義塾を筆頭とする非宗教系学校、そして帝国大学を先頭とする官立の学校だったと考えられます。実際、徳富蘇峰は言っています。「要するに福澤教育は、取らんが為めの教育にして、新島教育は与へんが為の教育なり。維新以来福澤流は一世を風靡し、日本は一大跳躍の進歩を為せり。然も日本が殆んど世界より除外視せられんとするの憂目を見たるも、亦た之が為めなり」（注7）と。

新島の考えでは、宗教のない（つまり、キリスト教のない）「世俗的」な学校は習育偏重に陥りがちで、全人格的な成長を妨げかねない。利己的な人物を作りやすいのです。彼は「日本ではキリスト教が教えられなければ、学校は青年にとっては概してきわめて危険な場所である」（注8）とさえ見えています。

福澤の教育では、もっぱら、この世で成功し、富や地位を得ていくために必要な知識や知恵を獲得することが重要になります。このような教育では、すべての人が大切であるという考え、貧しい人たち、社会的に弱い人たちに対する配慮を養うことはできません。

同志社にはキリスト教的な背景があります。キリスト教のある・なしが、同志社と非宗教系の「世俗的」な学校とを分けています。キリスト教を拒絶した福澤は、日本の国体は万世一系の皇統の基にあり、この国体が欧米列国に劣らない強さと豊かさをもたなければならないとし、その強く富んだ国体を維持するために教育はあるのだと考えました。このような考え方は、一人ひとりが教育を受け、智と徳においてしっかりした人格になることで国が維持されると考える新島のキリスト教的な考えとは対立するものです。

第3章

津田梅子の子英学塾と新島襄の同志社女学校

津田梅子と女子英学塾

新五千円札の顔になる津田梅子の話に移ります。津田梅子は、一八六四年十二月に江戸牛込に生まれます。父親は津田仙といい、新島襄（当時は七五三太）とは江戸で早くから親交のあった人です。

梅子は、一八七一年十二月、北海道開拓派遣の五人の女子留学生の一人として、先ほど述べた欧米視察の岩倉見視使節団の一行とともに米国に出発します。このとき梅子は七歳になったかならないかの年齢でした。アメリカ、ジョージタウン（今日のワシントンD. C.にある）に着いた梅子は、しばらくして、ランマン夫妻宅に預けられ、この子どものない夫妻の家で帰国するまでの十年間を過ごします。一八七二年、スティーブンソン・セミナリーに入学。この年、新島襄と公使館で会ったようです。一八七三年七月、フィラデルフィア近郊にある独立系キリスト教会で受洗します。このとき八歳。自らの意志で洗礼を決断したようです。

一八八二年、スティーブンソン・セミナリーを卒業し、山川捨松とともに帰国します。十七歳でした。

その後、一八八五年に華族女学校の教師となりますが、大学で学びたいという思いがあり、またアメリカ人バーコンの勧めもあって、一八八九年に再びアメリカに渡り、プリンマー大学に入学。一八九二年に卒業し帰国します。

アメリカの人権意識をもって育った梅子にとって、日本の女性の社会的地位の低さは看過できない事態でした。梅子は日本の女性の社会的な地位を上げたいと願いました。女性の地位を上げるには、教育が必要です。日本の女性が高度な教育を受け、職業人として社会に出ることが必須だと梅子は判断しました。梅子はとくに英語教師の養成を自らの使命と考えました。

そして一九〇〇年、先駆的な私立の女子高等教育機関「女子英学塾」を、麹町区一番町に開校しました。塾生は十人でした。これが今の津田塾大学の前身です。

女子英学塾（津田塾） 創立の理由と目的、特徴

津田梅子が日本で女学校を設立しようと思ったのは、すでに述べたように、アメリカの女性の地位と比べて、日本の女性の地位のあまりの低さに驚き、日本において、仕事を通じて社会に貢献できる、経済的に自立した女性の育成を目指したからです。梅子は英語を教えることのできる教員の養成を進めていきました。

女子英学塾の授業では、梅子が自ら学んだアメリカのリベラル・アーツの学校の形態を採用します。生徒は教員の講義を聞くだけではなく、時には教員と議論をします。一人ひとりに目が行き届くように、少人数教育を貫きます。

リベラル・アーツを導入したのは、「英語の技術習得のみに熱中せず、視野の広い女性で」（注9）あるためです。梅子は、キリスト教精神に則り、豊かな教養（人間性）と基礎学力・高度な専門性を兼ね備えた学生の育成を目指しました。

女子英学塾（津田塾）と同志社女学校

新島は女子教育については、どう考えていたのでしょうか。一八七五年設立の同志社英学校は男子のみです。

京都では女性宣教師が一八七六年、女子塾を開き「京都ホーム」と呼びました。同志社は一八七七年にこれを引き取る形で「同志社女学校」と改称し、新島が校長に就任しました。

新島は男子校や伝道の仕事で手一杯で、女学校に割く時間は限られていましたが、女子教育の必要性は十分に認識していました。アメリカ社会での女性の活躍ぶりを見てきていたもので、女子に男子と同等の教育を施すことを当然と考えていました。

新島は一八八三年六月に出した「同志社女学校広告」の中でこう書いています。「多少の学識を身につけた女性が自己の才能を誇り、人の言うことに素直に聞き従うという幼少からの美德

を失い、その結果世間からは『女性はおろ無学でもいから柔順なほうがよい』と嘆かれるようになった。これはひとえに教育者が女性の徳の育成を怠り、いたずらに知識だけを開発しようとした結果であろう」（注10）。このように新島は保守的にも感じられることを書いています。これは女子教育においても、男子と同じように、智育だけでなく徳の教育を含めた全人格的な教育が必要である、ということを強調したかったと捉えたいと思います。

これに対し、梅子は少し異なる考えを持っていました。梅子はキリスト教信者ですが、宣教師が教えるミッション・スクールは自立心の強い女性を育てるような教育をしていないと判断していました（注11）。女性の地位が低い、この日本の厳しい状況の中で、経済的にも自立した女性の英語教師を育成するという、確固たる目標を梅子は持っていましたので、同志社女学校よりも厳しい教育を施したわけですね。

おわりに

以上述べたことを簡単にまとめて終わりたいと思います。

福澤諭吉は国体の維持に役立つ教育を考えました。福澤にとって、教育とは、いわゆる、今日で言う「勝ち組」の育成であったとすることができます。

欧米の教育の根幹にはキリスト教があります。新島襄と津田梅子はキリスト教という根幹から日本での教育を構想することができました。世に役に立つ知識や学力だけでなく、学ぶ者一人ひとりの個性と人格を尊重しました。新島襄は枠に収まらない元気な学生を好みましたが、一人ひとりを大切に、成績の芳しくない学生にも愛情を向けました。津田梅子の場合、当初、自立した女性の英語教師の育成という、ピンポイントの目標をもっていましたので、比較的厳しい教育を推進しましたが、しかし、一人ひとりに目の行き届いた愛情深い指導を忘れませんでした。

今日の大学は、偏差値という、たった一つの秤によって平板に順序付けられてしまっています。創立者のいる大学は、学園に託された創立者の理想と夢があります。この創立者の理想と夢に立ち戻り、これを改めて引き継ぐことによって、その学園で学ぶことの意義を豊かに捉え直すことができるものと考えます。

ご清聴ありがとうございました。

【注】

1 志村和次郎『新島襄と私立大学の創立者たち』（キリスト新聞社 二〇〇四年）一〇六—一〇七頁参照、福沢諭吉「文明論之概略」（慶應義塾編『福沢諭吉全集』四（岩波書店 一九五九年）所収）一九—一九二頁参照、福沢「覚書」（慶應義塾編『福沢諭吉全集』七（岩波書店 一九五九年）所収）六六七頁参照、福沢「帝室論」（慶應義塾編『福沢諭吉全集』五（岩波書店 一九五九年）所収）二六五頁参照、福沢「尊王論」（慶應義塾編『福沢諭吉全集』六（岩波書店 一九五九年）所収）五頁参照。

2 志村 前掲書 ——四頁参照。

3 志村 前掲書 ——五一—六頁参照、「慶應義塾学生諸氏に告ぐ」（富田正文 土橋俊一編『福沢諭吉選集』（岩波書店 一九八〇年）所収）二五九頁参照。

4 同志社編『新島襄 教育宗教論集』（岩波文庫 二〇一〇年）三二頁。

5 「同志社創立十周年記念会での祝辞」（同志社「現代語で読む新島襄」編集委員会編『現代語で読む新島襄』（丸善 二〇〇〇年））一八四頁。

6 同志社社史資料室編『追悼集：同志社人物誌』八（同志社社史資料室 一九九四年）一四〇頁参照。

7 徳富猪一郎『新島襄先生』（同志社 一九五五年）一三四頁。

8 原文は英文。 'MY HUMBLE SCHEMES OF THE SPEEDY EVANGELIZATION OF JAPAN', in: "THREE APPEALS"（新島襄全集編集委員会編『新島襄全集』七（同朋舎出版 一九九六年）所収）三四六頁。

9 津田塾大学ホームページ <https://www.tsuda.ac.jp/aboutus/history/index.html> 二〇二二年六月六日アクセス。

10 「同志社女学校広告」（同志社「現代語で読む新島襄」編集委員会編 前掲書）一六四頁。

11 橋木俊詔『津田梅子 明治の高学歴女子の生き方』（平凡社新書 二〇二二年）一二三頁参照。